

日本人とタイ人の小学校におけるいじめに対する認識

—大学生に対する質問紙調査より—

アヌグーンシリポン・サーウィトリー (タイ)

1. 研究の背景と目的

筆者は母国の大学で日本文化についての授業を受け、日本の社会問題について勉強した。そのなかで一番興味を持ったのは、いじめ問題である。日本のいじめ問題は、これまで長い間問題とされてきたが、小林 (2017) によると、現在、そして今後さらに厳しくなる傾向が観察されているという。いじめの問題は学校でも会社でもよく見られ、苦しんでいる人が多くいるということを学んだ。また、別の機会に日本語の「出る杭は打たれる」ということわざを学んだ。このことわざは、他の人より目立つ人は憎まれやすいという意味である。日本社会は、個人より団体の利益が優先される集団主義的な社会であると言われている。目立つ人や弱そうな人など、他の人と外見や性格が違っている人ほどいじめられてしまうことが多いとされている。学校の場合も、このような他者と異なる児童・生徒はいじめられやすいとされている。したがって、集団主義的な社会は、いじめ問題の原因の一つであると考えられる。

いじめ問題は、日本だけで起きているわけではなく、タイでも頻繁にニュースなどが報じられている。タイ国精神衛生局 (2018) によると、60万人のタイの学生 (40%) が学校でいじめられた経験があるとされており、この数字は世界第2位のものである (ちなみに、第1位は日本である)。さらに、インターネットの普及により、SNS上での誹謗中傷や悪口、画像を投稿するという「ネットいじめ」の件数が増加しており、子どももこのような「ネットいじめ」問題の影響を受けているようである。タイでも、いじめ問題は頻繁に起こり厳しい問題となっているが、いじめの定義はまだ曖昧であるため、解決がまだまだ困難であると考えられる。

このようないじめに関する問題は、中学校や高校だけでなく、小学校でも見られる。文部科学省 (2019) によると、日本ではいじめの認知件数が増加傾向にある。特に小学校ではいじめが50万件発生しているとされており、中学校や高校より多い。一方、タイについては、タイ国健康促進財団 (2021) によると、いじめを受ける人が一番多いのは小学生 (29%) であり、その理由として「外見」が多いことが分かった。

以上のことから、小学校におけるいじめ問題に対し、日本人の大学生とタイ人の大学生の考え方について明らかにしたいと考えた。本研究では、まず、2章ではいじめの定義と関連する先行研究を概観して、3章で本研究の研究課題を述べる。つぎに、4章では日本人とタイ人の

大学生を対象に行った小学校におけるいじめ問題に関するアンケートの調査結果を示す。最後に、5章で本研究の考察を述べる。

2. 先行研究

2.1 日本における「いじめ」の定義

文部省（現文部科学省）は、「いじめ」について、1986年からこれまで3回定義を更新している。現在の定義は「学校などを通じて知り合った子ども同士の間でおこなわれた心理的・物理的な影響を与える行為であり、かつ被害者が心身の苦痛を感じているもの」（細尾・柏木、2021、p.256）であり、いじめ防止対策推進法で明確にされたものである。この定義から分かるように、現在では、「攻撃」ではなく心理的または物理的な「影響」を与えることが強調されている。そして、いじめの具体的な行動の種類として以下の9種類があげられている。

1. 冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
2. 仲間はずれ、集団による無視をされる
3. 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして引かれたり、蹴られたりする
4. ひどくぶつかられたり、引かれたり、蹴られたりする
5. 金品をたかられる
6. 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
7. 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
8. パソコンや携帯電話などで、誹謗中傷や嫌なことをされる
9. その他

2.2 日本のいじめ問題

小林（2017）がまとめた調査結果によると、2010年度から2015年度にかけて、日本の小学校のいじめ件数は増加している（表1）。特に、1年生と2年生は、年々いじめ件数が非常に増加しているという。また、図1に示したように、最も多く発見されたいじめ行動は「冷やかし・からかい」であるということが明らかとなった。また、「仲間外れ・無視」や「軽くぶつ」も比較的多い結果となった。これらのことから、日本の小学校においては、いわゆる「軽いいじめ」の方が「ひどいいじめ」よりも多く発生していると考えられる。

表1 平成22年度から平成27年度までの小学生学年別「いじめ」件数

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
平成22年度	3507	4937	6254	7079	7575	7539
平成23年度	3180	4507	5473	6556	6805	6603
平成24年度	15026	18916	21143	21897	21379	19023
平成25年度	18394	20074	20883	20500	20415	18482
平成26年度	20313	21377	20982	21659	20412	17991
平成27年度	22312	21388	20982	21658	20412	17991

出典：「小学校における「いじめ」について」：小林（2017、p.9）より引用

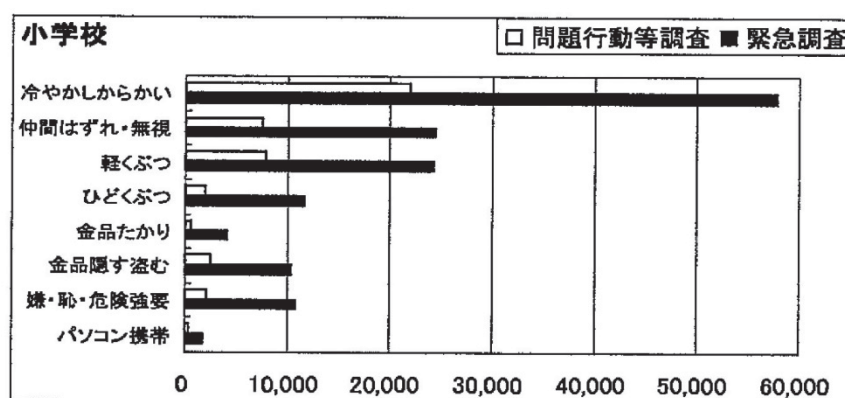


図1 いじめの態様別件数（平成23年度と平成24年度緊急調査の比較：小学校）：小林（2017、p.12）より引用

日本において、なぜ物理的ないじめ（≡ひどいいじめ）より間接的ないじめ（≡軽いいじめ）が頻度に起きるのかについて、藤原（2018）は、学校集団主義という文化が影響していると述べている。被害者が直接声を上げにくい状況のため、「いじめの態様」の調査で、「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」（62.3%）という回答が一番多い結果となった。また、14%の被害者が「仲間はずれ、集団による無視をされる」と述べていることも明らかとなった。つまり、ほとんどのいじめの形は、物理的な暴力ではなく、間接的に排除するという形で起こっていることが明らかとなっている。このように、現在、日本の学校におけるいじめ問題は、藤原（2018）が述べるように集団主義が大きな原因の1つとなっているのではないかと考えられる。

2.3 タイのいじめ問題

タイ国精神衛生局（2018）によると、60万人のタイの学生（40%）は学校でいじめられた経験があり、世界で第2位になったという。また、2020年の調査によると、10～15歳の児童1500名の中で91%以上がいじめられた経験があり、68%はいじめが一つの暴力であるという認識を持つことが明らかになった。同調査では、多く見られたいじめ行動として、頭を叩く（62.07%）、相手の親をばかにする（43.57%）、皮肉を言う（41.78%）を挙げており、その他、うわさを言う、悪口、殴る、ネットいじめもよく見られたと報告している。また、3分の1の対象者（35.33%）は一学期に2回、4分の1（24.86%）は一週間に3～4回いじめられていると回答したとしている。その加害者は、主に友達、先輩、後輩であった。いじめを受けたことの影響として、復讐したい気持ちが生じる、ストレスがたまる、勉強に集中できない、不登校、うつ病などを挙げている。

2.4 いじめに関する意識のアンケート調査

四辻・瀧野（2011）は、332名の大学生を対象にし、いじめの行動、大学生のいじめに対する捉え方、大学においていじめが存在する（しない）原因についてアンケート調査を実施した。その結果、大学におけるいじめは中学校や高校のいじめと異なり、「暴力」のような行為ではなく、「拒絶」や「集団による嫌がらせ」などの行為であることが明らかになったと述べている。このような行為は、一見「いじめ」とは関係なさそうな問題であるが、大学においてはいじめ問題であると認識されているという。そして、一般的ないじめ問題に対する大学生の認識は、「いじめに対する考え方の質問項目」の中で、「いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさけないおこない」「いじめは人間として、最低のおこない」「いじめはどんなわけがあっても許されない」の項目が多く選択された。その結果、いじめはどのような理由があっても許されないと考えている対象者が多いことが示された。一方で、いじめは悪いことだと考えながらも仕方がないというように捉えた人も一定数いたことも示された。

また、酒井（2010）は、2006年に「いじめについての意識や考え方」について調査を実施した。対象者は、愛知県内の3つの小学校の4・5・6年生の児童（合計303名）である。その結果、多くの対象者は、いじめはいけないと認識しており、「どんな理由があってもいじめはいけないこと」や「いじめられる子に悪いところがあっても、いじめはいけない」という意見が見られたと述べている。しかしながら、「いじめられる人も悪いところがあるのだから仕方がない」という項目について、賛成している回答も6割見られたこと、また、賛成する児童は学年が高くなるとやや多くなっているということが明らかになったと述べている。

3. 本研究における研究課題

以上、2章で示した先行研究から、日本人大学生は大学におけるいじめ問題について認識しているということが分かった。しかし、小学校におけるいじめ問題に対する認識はまだ明らかになっていない。加えて、いじめに対する日本人大学生とタイ人大学生の認識を比較する研究も筆者が調べた限り見られない。そこで、本研究では、「日本人大学生とタイ人大学生は、小学校におけるいじめ問題についてどのように認識しているのか」「日本人大学生とタイ人大学生の認識の共通点と相違点は何か」、以上2点を研究課題として調査を行うことにした。

4. 調査概要と結果

4.1 調査項目と調査方法

調査対象者は、23名の日本人大学生（男性10名、女性12名、その他1名）、22名のタイ人大学生（男性10名、女性9名、その他3名）である。調査はGoogle Formで行い、日本語版とタイ語版を作成した。質問項目は、四辻・瀧野（2011）のアンケート調査による「いじめに対する考え方の質問項目」と文部科学省（2019）による7つの「いじめ態様」を参考にして作成した。以下、表2にアンケート項目の一覧を示す。

表2 アンケート調査の項目

<p>1. いじめ問題全体の認識</p> <p>一般的ないじめについての質問です。いじめに対する考え方10項目があります。1~5の間で1つ選んでください。1~5の基準は、以下のとおりです。 1=「とても反対」 2=「やや反対」 3=「どちらとも言えない」 4=「やや賛成」 5=「とても賛成」</p> <ul style="list-style-type: none">いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさけないおこないですいじめはわるいことだけれど、もともと人間の心の中にある気持ちだから（いじめがあっても）しかたがないことですいじめはいじめるわけがしっかりしているときは（いじめを）許されますいじめは人間の最低のおこないで、よいとか悪いとかの質問ではありませんいじめは悪いことですが、いじめられる方もそれだけ強くなっていくのだから、必要なところもありますいじめはどんなわけがあっても許されませんいじめは悪いことですが、いじめられる方にも悪いところがあるはずですから（いじめがあっても）やむを得ませんいじめは人間のあるところに必ずあり、決してなくなりません
<p>2. 小学校におけるいじめ問題に対する認識</p> <p>2.1 現在、小学校でいじめ問題は起こっていると思いますか。</p>

-
- はい
 - いいえ
 - 分からない

2.2 (「はい」と回答した人のみ) その問題は深刻だと思いますか。

- はい
- いいえ
- 分からない

2.3 また、その理由は何ですか。(自由記述)

3. 小学校におけるいじめの行動

3.1 下の項目のなかで「よく起きる」と思うものから、「めったに起きない」と考えるものまで、1-7の順番を付けてください。※複数の項目で、同じ数字を選ぶことはできないようになっています。1～7の順番になるように回答をお願いします。

- 冷やかしたりからかい、悪口や脅し文句、直接に嫌なことを言われる
- 仲間はずれ、集団による無視をされる
- 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして引かれたり、蹴られたりする
- ひどくぶつかられたり、引かれたり、蹴られたりする
- 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- パソコンや携帯電話などで、誹謗中傷や嫌なことをされる

3.2 なぜこのようにランキングしましたか。理由や状態など具体的な例として挙げてください。(自由記述)

4.2 いじめ問題全体に対する認識

まず、日本人とタイ人の「いじめ問題」に対する全般的な認識の比較の結果を示す。質問項目は、以下の8項目である。

1. いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさないおこないです
2. いじめはわるいことだけれど、もともと人間の心の中にある気持ちだから(いじめがあっても)しかたがないことです
3. いじめはいじめられるわけがしっかりしているときは(いじめを)許されます
4. いじめは人間の最低のおこないで、よいとか悪いとかの質問ではありません
5. いじめは悪いことですが、いじめられる方もそれだけ強くなっていくのだから、必要などころもあります
6. いじめはどんなわけがあっても許されません
7. いじめは悪いことですが、いじめられる方にも悪いところがあるはずですから(いじめがあっても)やむを得ません

8. いじめは人間のあるところに必ずあり、決してなくなりません

上記 8 項目について、「5. とても賛成」「4. やや賛成」「3. どちらとも言えない」「2. やや反対」「1. とても反対」の 5 段階評定で回答を依頼した。日本人大学生とタイ人大学生の結果を比較して示したのが図 2 である。

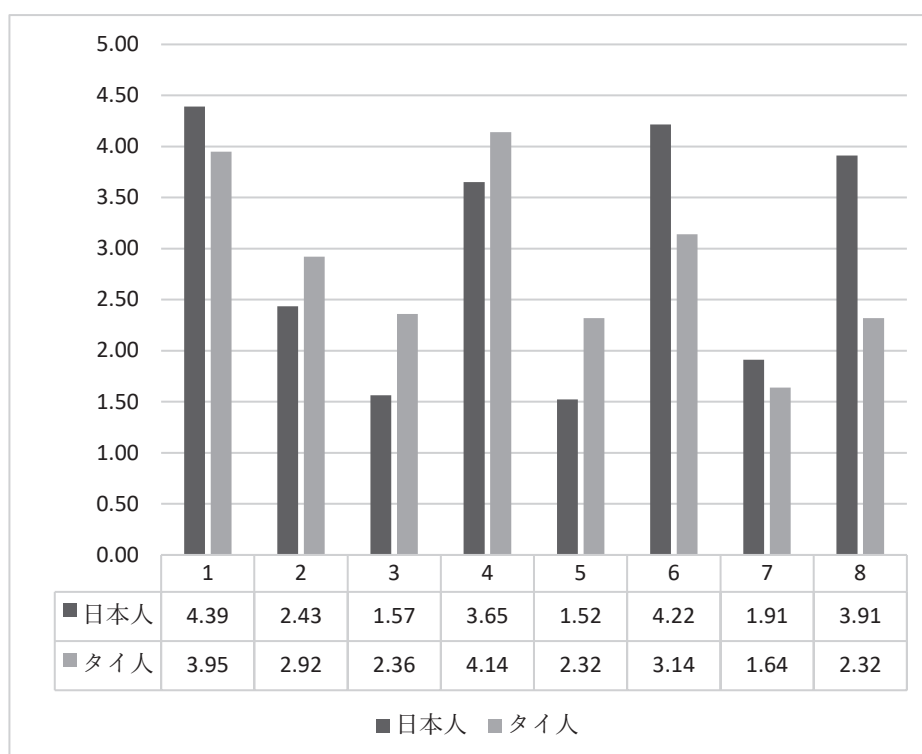


図 2 「いじめ問題」に対する全般的な認識の比較 (N=45 名)

結果を見ると、日本人大学生は「1. いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさないおこないです」(平均値 4.39) が最も高い結果となった。続いて、「6. いじめはどんなわけがあっても許されません」(4.22)、「8. いじめは人間のあるところに必ずあり、決してなくなりません」(3.91)、「4. いじめは人間の最低のおこないで、よいとか悪いとかの質問ではありません」(3.65) も回答の平均が 3.0 以上で、比較的高い結果であった。

一方、タイ人大学生は、「4. いじめは人間の最低のおこないで、よいとか悪いとかの質問ではありません」(4.14) が最も高い結果となった。次に、「1. いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさないおこないです」(3.95) と「6. いじめはどんなわけがあっても許されません」(3.14) も平均 3.0 以上で、比較的高い結果となった。

4.3 小学校におけるいじめ問題に対する認識

次に、小学校のいじめ問題の現状に対する認識度の結果である。「現在、小学校でいじめ問題が起こっていると思いますか」という質問に対して、「はい・いいえ・分からない」という3つの選択肢から一つを選んでもらった。その結果、図3-1と図3-2に示したように、日本人のグループもタイ人のグループも「はい」と答えた対象者が9割を超え、小学校のいじめ問題の存在を認識する人がほとんどであるということがわかった。

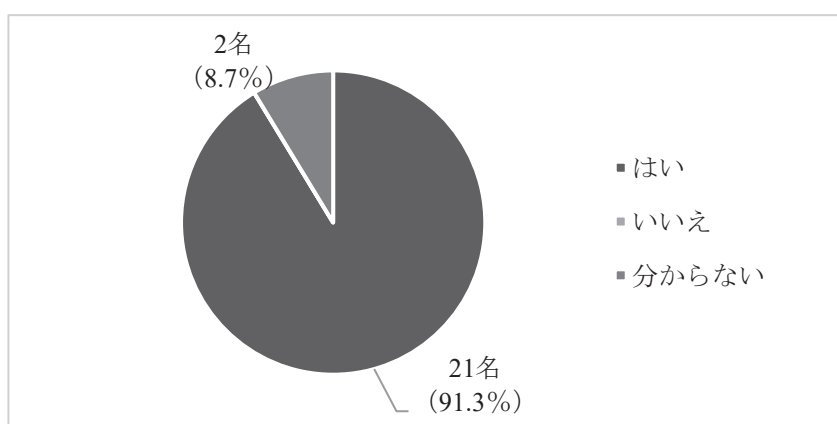


図3-1 小学校におけるいじめ問題の存在の認識度（日本人）（n=23名）

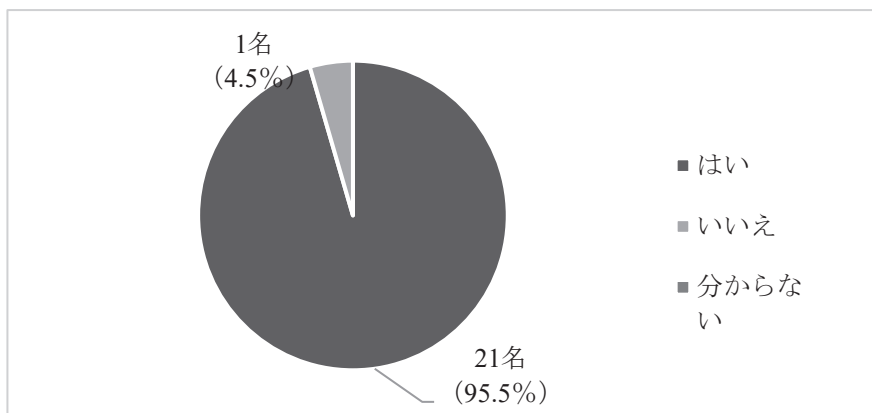


図3-2 小学校におけるいじめ問題の存在の認識度（タイ人）（n=22名）

そして、いじめ問題の深刻度に関する認識も調査した。小学校におけるいじめ問題の存在に気づいたという回答者に対し、「小学校におけるいじめ問題は深刻だと思いますか」について、追加の回答を依頼した。その結果、17名の日本人大学生が深刻な問題だと回答し、分からないと回答したのは4名であった（図3-2）。一方、タイ人の大学生は17名が深刻な問題だ

と回答し、2名が深刻ではないと答え、残りの2名は分からないと回答した（図3-3）。このことから、日本人の大学生もタイ人の大学生も、大多数は小学校でのいじめ問題を深刻な問題であると考えていることが明らかとなった。

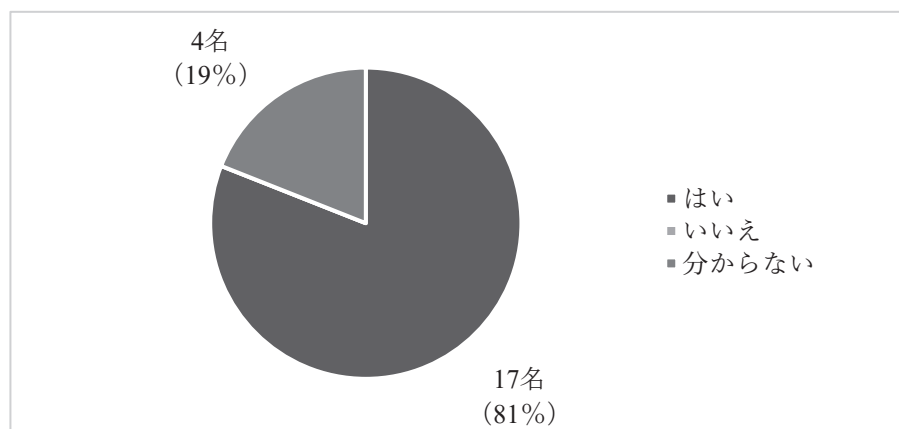


図3-3 小学校におけるいじめ問題の深刻度に関する認識（日本人）（n=21名）

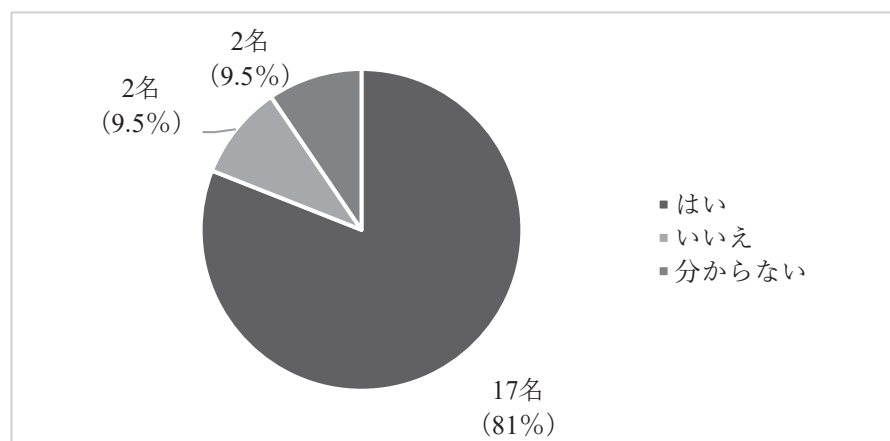


図3-4 小学校におけるいじめ問題の深刻度に関する認識（タイ人）（n=21名）

4.4 小学校におけるいじめ行動の順位付け

次に、小学校におけるいじめの様態についての認識を調査した。本研究では、文部科学省（2019）の7つの「いじめ態様」を参考し、アンケートの質問項目を作成した。アンケートは順位回答として、下記の7項目について「よく起きると思う」（1位）から「めったに起きないと思う」（7位）の7段階で回答を依頼した。

1. 冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、直接に嫌なことを言われる
2. 仲間はずれ、集団による無視をされる
3. 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして引かれたり、蹴られたりする
4. ひどくぶつかられたり、引かれたり、蹴られたりする
5. 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
6. 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
7. パソコンや携帯電話などで、誹謗中傷や嫌なことをされる

日本人に対する調査結果を表 3-1、タイ人に対する調査結果を表 3-2 で示す。それぞれの表には、1 位から 7 位までそれぞれ選んだ人数も示している。そして、結果の分析方法は、7 点から 1 点までそれぞれの順番に点数を付け、合計する。基準は、点数が高い項目が高く評価された行動である。

表 3-1 小学校におけるいじめ行動の順位付け（日本人）（N=23 名）

	1 位 (7 点)	2 位 (6 点)	3 位 (5 点)	4 位 (4 点)	5 位 (3 点)	6 位 (2 点)	7 位 (1 点)	合計
1.冷やか しやから かい	11 (77)	6 (36)	4 (20)	1 (4)	0 (0)	1 (2)	0 (0)	139 点
2. 仲間はずれ	3 (21)	10 (60)	6 (30)	2 (8)	1 (3)	0 (0)	0 (0)	122 点
3. 軽くぶ つかり	2 (14)	3 (18)	4 (20)	7 (28)	3 (9)	1 (2)	1 (1)	92 点
4. ひどく ぶつかり	0 (0)	1 (6)	0 (0)	6 (24)	5 (15)	3 (6)	4 (4)	55 点
5. 金品た かり	1 (7)	0 (0)	3 (15)	0 (0)	3 (9)	6 (12)	4 (4)	47 点
6. 恥・ 嫌・危険 強要	0 (0)	1 (6)	2 (10)	2 (8)	4 (12)	6 (12)	3 (3)	51 点
7. ネット いじめ	5 (35)	1 (6)	2 (10)	2 (8)	3 (9)	1 (2)	6 (6)	76 点

表 3-1 で示したように、日本人では項目 1「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、直接に嫌なことを言われる（合計=139 点）」が 1 位（「よく起きると思う」）を選ぶ人が最も多かった。また、「仲間はずれ、集団による無視をされる（122 点）」と「軽くぶつかられたり、

遊ぶふりをして引かれたり、蹴られたりする（92点）」も、よく起きると認識している人が比較的多かった。一方、「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする（47点）」や「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする（51点）」は、全体的によく起きると思うという回答が少ない結果となった。

表3-2 小学校におけるいじめ行動の順番付け（タイ人）（n=22名）

	1位 (7点)	2位 (6点)	3位 (5点)	4位 (4点)	5位 (3点)	6位 (2点)	7位 (1点)	合計
1.冷やか しやから かい	5 (35)	6 (36)	4 (20)	1 (4)	1 (3)	1 (2)	0 (0)	100点
2.仲間はずれ	9 (63)	2 (12)	5 (25)	2 (8)	3 (9)	0 (0)	0 (0)	117点
3.軽くぶ つかり	1 (7)	2 (12)	2 (10)	4 (16)	5 (15)	6 (12)	0 (0)	72点
4.ひどく ぶつかり	0 (0)	1 (6)	1 (5)	2 (8)	0 (0)	4 (8)	11 (11)	38点
5.金品た かり	1 (7)	2 (12)	1 (5)	3 (12)	4 (12)	4 (8)	2 (2)	58点
6.恥・ 嫌・危険 強要	4 (28)	6 (36)	5 (25)	2 (8)	4 (12)	1 (2)	0 (0)	111点
7.ネット いじめ	2 (14)	2 (12)	3 (15)	5 (20)	2 (6)	3 (6)	3 (3)	76点

表3-2で示したタイ人大学生の場合、1位を選んだ人数が最も多いのは項目2「仲間はずれ、集団による無視をされる（合計=117点）」であり、次に多いのは項目1「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、直接に嫌なことを言われる（100点）」と項目6「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする（111点）」であった。また、よく起きると思うという回答が少ない行動は、「ひどくぶつかられたり、引かれたり、蹴られたりする」と「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする」であった。

このように、表3-1と表3-2を比較すると、項目6「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする」という項目は、日本人の大学生とタイ人の大学生との間で、合計の差が大きかった。

5. 結果のまとめと考察

上記の結果に基づき、2点を考察する。1つ目は、いじめ問題全体の認識である。4.2で示した図2によると、日本人大学生は、全般的ないじめ問題に対して「いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさないおこないです」という項目に賛成している人が最も多いことが分かる。また、タイ人大学生の結果を見ると、図2に示したように「いじめは人間の最低のおこないで、よいとか悪いとかの質問ではありません」という項目が最も高い回答となった。先行研究では、酒井（2010）が、小学校4・5・6年生に対していじめの認識の調査を行った。その結果、多くの対象者（小学生）は、いじめはいけないと認識しており、「どんな理由があってもいじめはいけないこと」と「いじめられる子に悪いところがあっても、いじめはいけない」という意見があると述べている。酒井（2010）と本研究は、対象者の年代や属性は異なるが、小学校におけるいじめ問題を認識している割合が高いという点では共通している。本調査の日本人とタイ人の大学生の回答から、2つのグループの対象者は全体的にいじめ問題を認識しているということが明らかとなった。

次に、小学校におけるいじめの行動である。図3-1と図3-2に示したように、2つのグループの対象者は9割を超え、小学校のいじめ問題の存在を認識していたことが明らかとなった。さらに、図3-3と図3-4を見ると、この問題を深刻だと考えている対象者が多いことが分かった。そして、いじめの行動についての意見は、表3-1で示したように、日本人大学生は「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、直接に嫌なことを言われる」という行動が起きる可能性が一番高いと考えていた。一方、タイ人大学生がよく起きると思うと回答しているのは、表3-2で示したように、「仲間はずれ、集団による無視をされる」という行動であった。

小林（2017）は、2011年度と2012年度に日本の小学校を対象に行った調査のなかで、「冷やかしかからかい」、「仲間外れと無視」、「軽くぶつかり」といういじめ行動はよく発生していたと述べている。その一方、「パソコンや携帯」、「恥・嫌・危険強要」「金品たかり」に関する行動の件数は少なかったと述べている。小林（2017）の研究と比較すると、本調査のいじめ行動についての対象者の回答は、似ている点が見られた。例えば、「冷やかしかからかい」と「仲間外れ」の事件発見率が高かったが、「金品たかり」の行動はあまり発見されなかったという点である。しかし、小林（2017）の研究では、2011年度、2012年度に行った調査を基にしているということもあり、本研究とは異なる点も見られる。「ネットいじめ」に関する項目は、先行研究では件数が低いですが、今回の調査結果（表3-1と表3-2）から、ネットいじめを認識している人が少なくないことが明らかになった。

しかし、日本人大学生とタイ人大学生の相違点は、物理的ないじめ行動である。「ひどくぶつかり」は、両方の対象者が同じに「めったに起きない」と回答している人が多い。だが、調査項目3.2の自由記述の回答を見てみると、日本人大学生にとって、「嫌なことや恥ずかしいこ

と、危険なことをされたり、させられたりする」といった行動は、大人も発見しやすく、あまり起きないと思っていることが明らかとなった。一方、タイ人の大学生は、このような行動はよく見られ、また経験もあると回答している。このように、日本とタイ人大学生は、小学校のいじめに対する認識度が高いという点は共通しているが、いじめの行動に対する認識は少しズレがあるのではないかと考えられる。

6. 結論と今後の課題

本調査より、多くの日本人とタイ人の大学生は、自国の小学校におけるいじめ問題について問題意識を持っていることに明らかになった。その一方で、小学校におけるいじめの存在を認めつつも、日本とタイではいじめ行動の認識が異なっているのではないかとすることも示唆された。今回の研究では、日本とタイの大学生に対するアンケート調査を通して、小学校におけるいじめの原因と行為についての認識を明らかにすることを試みた。今後は、現在ネットいじめの被害者が増加し続けており特に注目すべき問題であると考えられるため、特にネットいじめの問題に焦点を絞って、調査を行っていききたい。

参考文献

- 会沢信彦・平宮正志(2018)「大学生が経験したいじめの質的分析(2)―小学校4～6年時の経験―」『文教大学教育学部紀要』42, 11-18
- 奥山直美 (2020) 「いじめ、過去最多 61 万 2,496 件...小学校で増加傾向」 ReseMom (リセママ) https://resemom.jp/article/2020/10/23/58706.html?pickup_list_click1=true (2022年07月22日最終日アクセス)
- 小林哲郎(2017)「小学校における「いじめ」について」『心理相談研究』18, 3-14
- 酒井亮爾(2010)「小学校におけるいじめ(4)」『愛知学院大学心身科学研究所紀要』2(1), 95-103
- 住田正樹 (2008) 「いじめのタイプとその対応」『放送大学研究年報』25, 7-21
- 細尾萌子・柏木智子(2021)『小学校教育用語辞典』ミネルヴァ書房.
- 藤原正篤(2018)「日本人と「集団主義」―「学校集団主義」に着目して―」『早稲田大学文化構想学部現代人間論系岡部ゼミ・ゼミ論文/卒業研究』, 317-338
- 四辻伸吾・瀧野揚三(2011)「大学生のいじめ観 (II)」『大阪教育大学紀要 第IV部門:教育科学』60, 91-109 (タイ語)
- INNOWHALE(2022)「การบูลลี่ในโรงเรียน」<https://www.innowhale.com/การบูลลี่ในโรงเรียน/> (2022年07月23日最終日アクセス)